

【花盗人（はなぬすびと）】花のついた枝を盗み折る人。

【花盗人には酒を盛るもの】ことわざ。風流を許す心。

「花盗人には酒を盛るものじゃと申す程に」（狂言「花盗人」）

狂言「花盗人」のあらすじは、夜間の花盗人に入られた家人が翌日に首尾よく犯人を捕らえ、桜の木に縛り付け成敗するという話です。この盗人がなかなかの風流人でありまして、家人より歌を一首詠めば罪を許そうと言われ、「この春は花の下にて縄つきぬ烏帽子桜と人や云ふらん」と詠みます。これに家人が喜び、罪を許した上に酒を振舞い、さらに枝一本を与えるという展開になっています。要するに、枝を折ったことよりも花を愛でる心が大切だというわけです。

桜に限らず枝を折るような真似は感心しませんが、花を愛でる心に免じて許すくらいの余裕も持ちたいと思いますね。けれども、そのような方も実際におられるのでありまして、鎌倉幕府が

つちみかど

始まった直後に即位された**土御門天皇**は、こよなく風雅を愛する文人肌のタイプでした。

左近の桜を盗む事件

平安京の内裏（天皇・皇族と奉仕する宮人が起居する区画）に紫宸殿と呼ばれる建物があり、南面する庭に桜と橘の木が植えられています。紫宸殿から見て桜は左側、橘は右側にあります。

「左近の桜・右近の橘」の名で有名ですが、由来は、公的な儀式において衛兵が一線に並ぶ際、左衛門府という役所に属する衛兵の先頭が桜の辺りから、同様に右衛門府の衛兵は橘の辺りから並ぶことに因んでいます。ですから、左近の桜は天皇を象徴するものでもあったわけです。

ここんちょもんじゅう

さて、土御門天皇に関する逸話が『古今著聞集』（橘成季著、延長六年・1254）という説話集の第十九巻に登場しています。それは藤原定家が花泥棒を働いたという事件なのですが、この場合の花泥棒とは、接ぎ木をするために花が咲く前の蕾段階の枝を切り取った行為でした。定家は『新古今和歌集』の撰者・歌人として著名ですが、この時は下級貴族と呼べる段階です。ただ八重桜の愛好家として宮中に知られ、各地から珍しい種を取り寄せては接ぎ木を施すなど、収集と植栽に励んでいました。つまり、異常なほどの桜マニアだったわけです。

承元四年（1210）の正月某日のこと、定家は家来と二人で御所に潜入し、畏れ多くも紫宸殿の南庭の桜（有名な左近の桜）の枝を家来に命じて切り取らせたのです。定家としてはこっそりと切るつもりでしたが、案の定、この一部始終を御所の職員に見られていました。蕾も固い時期に桜樹の下に人が立つのはおかしいと映ったわけですね。その職員は天皇に仕える女官に報告し、女官は驚いて直ちに土御門天皇に伝えました。ですが、天皇は心優しい方で、且つ定家の歌心を深く愛していらっしゃいました。そのため、やんわりと諫められたのです。天皇は女官に命じて女文字で自分の詠んだ歌を美しい料紙に書かせ、女官の使いを定家のもとへ遣ります。

「無き名ぞと 後に咎むな 八重桜 移さん宿は 隠れしもせじ」

歌の大意は、八重桜の枝を切り取った者の名は隠れようもないことだから、誰の仕業なのかと

後々にお咎めにならないように、ということです。

一方の定家の返歌は下記の通りで、天皇を慕い、日夜桜を愛でております、という内容です。

「暮ると明くと 君に仕ふる 九重の 八重咲く花の 陰をしぞ思ふ」

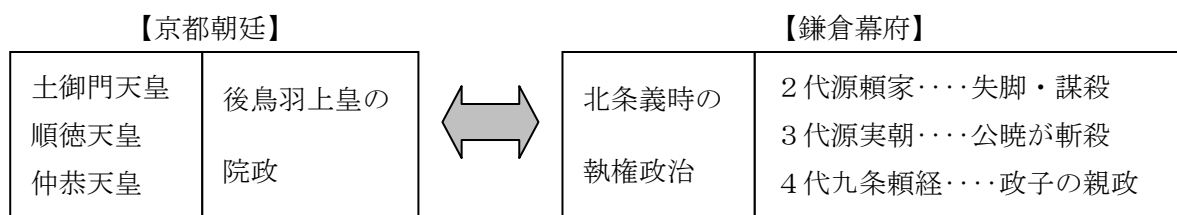
届いた歌が天皇のものであることを察した上での返答であり、実質上は自白したも同然です。天皇は言外に「本件は自分が収めるから、今後無茶なことはせぬように」と申されたのであり、そのことが定家にも伝わったわけです。それにしても、雅びというか奥ゆかしい交情ですねえ。咎めることは簡単ですが、ここまでの配慮は難しい。実際、定家は罪に問われませんでした。

鎌倉と京都の対立

土御門天皇の在位期間（1198～1210）は後鳥羽上皇の院政の時代です。わずか4歳で即位した幼帝土御門は実質上何もできませんでした。父の後鳥羽上皇からすれば、温順で、心優しい性格なども鎌倉幕府に対抗するには物足らなく映りました。承元四年（1210）、定家の花泥棒事件と同じ年ですが、その11月に順徳天皇（土御門天皇の弟）へと譲位させられました。

秋の色を送り迎へて雲の上に馴れにし月ももの忘れすな（土御門帝が内裏を去る時の歌）

順徳天皇は兄とは違い剛直な性格の持ち主で、反幕府という姿勢を明らかにしたわけですが、やはり年少のため後鳥羽上皇の院政は続きました。むしろ、幕府との対立が先鋭化したわけで、その間、退位した土御門は機会ある毎に対立を避けるように働きかけておられました。



その頃の鎌倉幕府というのは政治の実権を執権の北条義時が握り、将軍がお飾りの時代です。2代将軍頼家（頼朝の長男）も3代実朝（同次男）も謀殺され、源氏の正統は絶えていました。尚、実朝などは都に憧れ、御家人からの批判をよそに和歌・管弦・蹴鞠などに親しんでいます。和歌は定家から激賞を受けるほどであって、自ら『金槐和歌集』を作り719首を収めています。そういうわけで朝廷からの覚えはめでたく、右大臣まで昇進しております。しかし、その祝宴を鶴岡八幡宮で催した帰りに斬殺されたわけで、枝ならぬ桜の樹そのものが伐られたも同然です。このことで朝廷側が警戒し、両者の関係が冷えるのも当たり前でしょうね。

さて、将軍後継者がいない事態に対処するため、幕府は朝廷より皇子を迎えようとなりました。正統性を補うためです。しかし、後鳥羽上皇は寵妃・亀菊（伊賀局）の所領の地頭を解任せよと要求するなど、虚々実々の駆け引きが行われます。最後は、頼朝と縁戚関係にあった九条道家の4男頼経を将軍として迎えました。これは摂家将軍と呼ばれますが、両者による妥協策ですね。頼経・頼嗣の父子2代続いたわけですが、やはりお飾りでしかなく、将軍職の実態というものは尼将軍と呼ばれた北条政子が表に出て采配を振るうというものに他なりません。

※地頭……鎌倉幕府が荘園管理のために置いた役人で、年貢徴収や治安維持に当たった。

ここで、鎌倉と朝廷との対立の要因を整理しておきますと、詰まるところは**税金問題**であり、具体的には朝廷（および貴族・大寺社）が所有していた荘園の徴税権を巡っての争奪戦でした。そもそも、武士団というのは開墾地主のようなものでしたから、土地や労働についての考え方が公家とは全く違います。武家にすれば、公家の荘園などは不労所得そのものでありました。

鎌倉（北条義時）と京都（後鳥羽上皇）との対立が深まって、土御門天皇が憂慮された事態となりました。そして、両者の行きついた先が**承久の乱**（承久三年・1221）と呼ばれるものです。ここで乱そのものについては詳しく述べませんが、鎌倉政権内部の不安定さを見込んで挙兵した後鳥羽上皇側は、結束した鎌倉側によって散々に打ち負かされることになったのです。

実は、各地の武士団の中には朝廷の呼び掛け（宣旨）に呼応する者も現われ、鎌倉武士団でも怯む者がいたようです。しかし、北条政子の一世一代の名演説が武士団を結束させたと言われております。この時、政子は齢 65、まさに老将軍と呼べる存在でした。

さて、乱後の戦後処理ですが、主だったものは下記の通りです。

後鳥羽上皇	隠岐に配流
土御門上皇	最初は無罪、後に土佐に配流（2年後には阿波へ）
順徳上皇	佐渡に配流
仲恭天皇	退位……即位の礼もしないまま
（後鳥羽上皇の）近臣	乱の首謀者とされ、斬殺または自害。
院方の所領 3,000 余カ所を没収	新たに地頭を配置

上皇や天皇の流罪なり退位は当然の措置であります。所領の没収というのは大きいですね。幕府の財政基盤が固くなりますし、武功を挙げた者への褒賞も十分可能です。一方、公家政権は中枢の人物がすべて排除され、財政基盤も失いましたので、急速に衰えていきました。

ところで、厳罰の措置の中で**土御門天皇だけが当初は無罪**とされています。謀議に加わらず、対立回避に動いたことを幕府側も評価したわけですね。ところが、上皇自身がこれを潔しとせず、等しく流罪を申し出られたと伝わっています。普通では考えられないことですね。

憂き世にはかかれとてこそ生れけめ ことわり知らぬわが涙かな（帝が土佐で詠んだ歌）

土御門帝は、ただ優しいだけの人ではありませんでした。桜にも似て、雅さも凜とした強さもお持ちのようです。尚、このような帝の姿勢には幕府も心を動かされたわけで、後に四条天皇が譲位される際、幕府は土御門帝の皇子（後の後嵯峨天皇）の即位を奏請したほどです。

桜は散りゆく様も見事で、これもまた人の心を打ちます。散りしおれた花びらが川面を漂う。何枚も連なっとうねりながら流れ行く様子を筏（いかだ）に見立てて、「**花筏**」と呼ぶそうです。行く春を惜しむ気持ちが為せるものなのでしょうが、何とも抒情的で、美しい表現であります。確かに、花の命は最後まで全うさせてやりたいもの。枝を盗むのは定家だけで十分でしょう。